

ぼくのおばあちゃんはドラえもん

しもやま 恭生きょうせい

家で宿題をしていた時の事だ。つくえの上が暗い。するとお母さんとお父さんが、

「電気スタンドが有ったらよかったね。そうだ、となりの家に聞いてみるか。」と話し出した。

「となりの家」とは、ぼくのおじちゃんとおばあちゃんの家の事だ。しばらくして、おばあちゃんが電気スタンドをかかえて来た。「有ったよ」わらいながら、おいて行った。それは、ぼくのお父さんが子どもの時に使っていた物だった。

「何でも出て来るな。なつかしいなあ。」と言いながらお父さんも、わらって見ていた。おばあちゃんの家からは何でも出て来る。お父さんが小学生だった時のテスト用紙、ウルトラマンのけしゴム、おみやげでもらったキーホルダー、三十年前のおばあちゃんの水着。「これは、せつたいにないだろう。」と思う物も出て来る。タイムマシンにのってむかしに来た気分になる。

「もう、いいかげんにすてないとなあ。」と言いながら、しまつている。こんな風大切にひとつおいてくれたおかげで、ぼくは今、明るいつくえで勉強が出来ている。

ぼくは、八月十一日で九才になった。たん生日には、いつもだれかがぼくの小さかった時の話しをしてくれる。おばあちゃん、ぼくが赤ちゃんだったころいつも、おんぶをしてね

かせてくれたらしい。そんなおばあちゃんとよく、せいくらべをする。今ではおばあちゃんのまゆ毛の所までせがのびた。もう少しでぬかされそうなのに、うれしそうにわらう。ぼくの方が大きくなったら、おばあちゃんをおんぶしてビックリさせようと思う。きつとまた、わらうんだろうな。

夏休みに入つてすぐ、ぼくはお母さんと大ゲンカをした。そして家からおい出された。なきながらとなりの家のドアを開けた。

「いらっしやい、どうしたの。」あつ。おばあちゃんがいた。ケンカした話を聞きながら、「こまつたな、何にもないんだよ。」なんて言うけど、パン、おかし、ジュースなどがさくさく出てくる。話をしているうちに、家をおい出された事もわすれてしまった。夜におばあちゃんのおいのするふとんでいっしょにねた時、たくさんいたぼくのせなかを、「トントン」してくれた。おばあちゃんつて「あつたかい」ぼくのおばあちゃんできてくれて、ありがと。

いつでも見まもつていてくれる、こまつた時たすけてくれる。だからおばあちゃんは「ドラえもん」なんだ。たくさん食べて、わらって長生きしてね。大すきなおばあちゃんをぼくの子どもにも、会わせたいんだ。